

上原兼善

(うへはらけんぜん)

略歴

一九四四年二月二十日、沖縄県生まれ。
七四年、九州大学大学院文学研究科博士課程中退。九州大学文学部助手、宮崎大学教育学部助手・同助教授、岡山大学教育学部助教授・同大学院教育学研究科教授を経て、二〇〇九年退職。現在、岡山大学名誉教授。博士(文学)。著書に『鎖国と藩貿易―薩摩藩の琉球密貿易』(八重岳書房、一九八一年)、『幕藩制形成期の琉球支配』(吉川弘文館、二〇〇一年)／『伊波普猷賞』ほか。本賞受賞作は、日経・経済図書文化賞、徳川賞も受賞。



〈受賞のことば〉

琉球は一六〇九年(慶長一四)に薩摩藩の侵攻を受け、実質的にその支配下に置かれませんが、中国との冊封朝貢の関係は認められ、大陸に開かれた口の一つになります。幕府は長崎に、対外交渉の窓口としての都市機能を維持するために貿易を許したように、琉球にも中国からの唐物を輸入し、それを日本市場で換金すること、あるいは中国皇帝への朝貢品を調達することを認めました。そうした琉球口維持のメカニズムを明らかにしようとしたのがこの度の私の研究です。

そのメカニズム自体、収奪構造をとまなうもので、内部に琉球と薩摩藩との大きな矛盾がかかえ持つものであったといえます。また、薩摩藩は幕府の貿易統制機関である長崎会所に参入、その機能を攪乱するにいたったという点では、幕府との矛盾を内包するものであったことが指摘できます。

私の研究は、中央からはずれた琉球という周縁の、しかも貿易という地味なテーマを取りあげたものです。そのこともあって出版は難産を極めました。それだけにこうした荣誉ある賞が頂戴できたのはとても感激です。角川文化振興財団に心からお礼を申し上げます。